

【3】 大師執筆法

写1巻

〔書名よみ〕 だいししゅひつほう／しつびつほう

〔著編者〕 伝空海 〔写刊年次〕 享保十三年（一七二八）

〔外題〕 大師執筆法

〔内題〕 ⑦執筆法 ①使筆法

〔その他〕 なし

〔残欠状況〕 全 〔保存状況〕 小破 〔装訂〕 卷子本 〔表紙〕 紺色
 無地、(八双) 有、竹 (巻緒) 有、平打 〔軸〕 印可軸 〔表紙寸法〕
 縦二九・九×横二二・七糎 〔紙数〕 一一紙 〔本文用字〕 漢字
 〔界線〕 ナシ 〔法量〕 縦二九・九×横四一・七糎 ①四一・八、②
 四一・三、③三九・三、④四一・一、⑤四〇・二、⑥四〇・四、⑦三九・四、
 ⑧三九・五、⑨四一・二、⑩四二・〇、⑪一〇・九糎 〔料紙〕 楮紙(杉原)
 〔書入〕 注記(朱・墨) 〔訓点〕 有、返点・送仮名・合符・傍訓(朱)
 〔印記〕 ナシ 〔表紙見返〕 斐紙(泥間似合・雲母引) 〔備考〕 裏打
 修理済。巻頭に「松橋経蔵」と墨書がある。題箋は剥離。題箋の外題下
 に「智之箱_二入」とあり。

〔奥書〕

享保十三年申年九月写校了 空海和上御筆_{云々}

金剛峯寺

沙門真源

〔解題〕

弘法大師空海は名筆家で、日本書道の祖とされる。その空海の「執筆

法」と「使筆法」を挿絵を用いつつ解説した書である。

空海は道真・道風と並ぶ三聖の一人であり、嵯峨天皇・橘逸勢と並ぶ三筆の一人でもある。また書聖と仰がれ、様々な奇瑞が伝えられてきた。

本書は、江戸時代になって弘法大師の説として作られたもので、空海の執筆法や使筆法を記す。「執筆法」では筆の持ち方を図示し、指の使い方を解説する。また「使筆法」では、点、ハネなどの運筆を十二種挙げて具体的に記している。これらの十二点は、大師流の基本として尊ばれたものである。

また空海の執筆法を伝える書として、様々な書物が著された。楠見敏雄氏によれば、弘法大師の書、大師流の資料には、以下のものが挙げられる。

- 1、弘法大師真跡執筆使筆法 一巻
- 2、空海執筆法 一冊
- 3、弘法大師真跡執筆法 一巻
- 4、弘法大師真跡執筆使用法 一冊
- 5、高野大師在唐傳來執筆法 一冊
- 6、高野大師在唐傳來執筆法 一冊
- 7、高野大師真跡書訣 一冊
- 8、大師流書契筆正伝 三冊
- 9、弘法大師十二点 一冊
- 10、十二点の大事 一冊
- 11、書法十二点 一冊
- 12、弘法大師御製八十一枚 一枚
- 13、弘法大師筆道点画許之書 一冊

円覚寺本の奥書には、享保十三年（一七二八）九月、空海和尚の御筆を金剛峯寺（高野山）の沙門真源が写したものとある。真源については

詳しいことがわからないが、空海の執筆法を伝える書の中でも、円覚寺本は、年代もわかる、大変重要な伝本であると考えられる。書写した場所については金剛峯寺（高野山）なのかどうか不詳である。また写した本についても不明である。

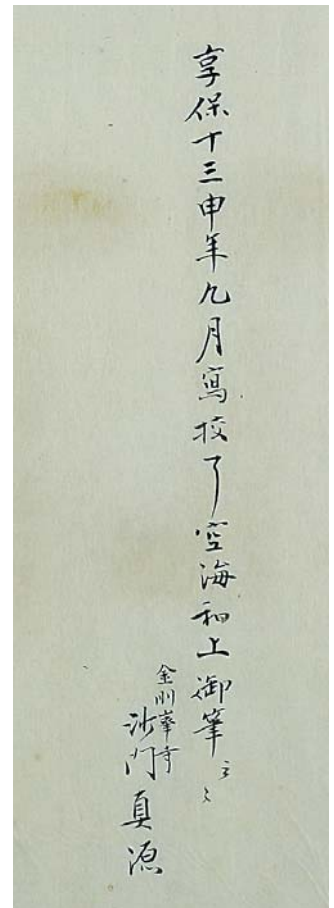
活字は、『弘法大師全集』三に所載する。比較すると、円覚寺本は、執筆法の次に使筆法があり、トメ、ハネ、などの解説の後、筆の挿絵と解説があるが、『弘法大師全集』では、使筆法の次に筆の挿絵と解説。そのあとに使筆法としてトメ・ハネの解説がなされている。筆の絵と解説の位置が大きく異なっている。7の寛政二年刊、屋代弘賢の『高野大師真跡書訣』は、「執筆法」と「使筆法」の解説をしたものだが、筆の絵と解説の部分については言及がない。

円覚寺本は、高野山で書写された奥書を持つという点に加えて、第一紙の冒頭に「松橋経蔵」と墨書がある点も重要である。松橋経蔵の所蔵する経緯も、また円覚寺への来歴も未詳である、今後の課題としたい。

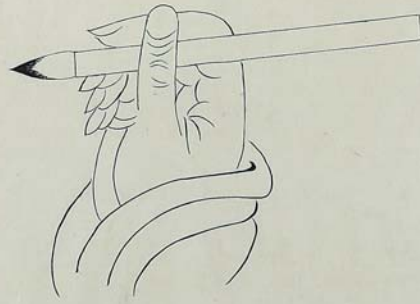
〔参考〕

- ・源弘賢集註『執筆使筆法積文』（擁萬閣 山口屋 森江佐七 刊）
- ・小松茂美『日本書流全史』（講談社、一九七〇年）
- ・楠見敏雄「弘法大師の書流―大師流について―」（『密教文化』一四九、一九八五年）

（渡辺 麻里子）



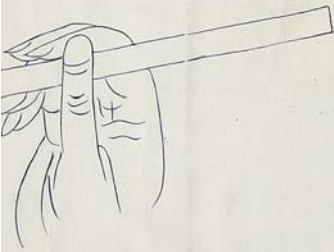
執筆法



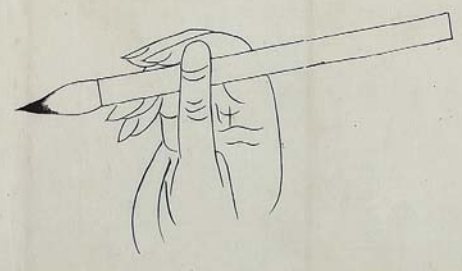
松橋經巖

置筆於大指中骨
前居轉動之際
以小指齊中指並
助為力不謂實指

前居轉動之際
以小指齊中指並
助為力不謂實指
度掌也羅執之至
牢必須運之自在
令人好置筆於中骨
礙其勢動筆指塞
管徑其力勢急
愈滯緩之不使



研其利
 常任其力勢急
 愈滯緩之不便



毫筆之妙
 俗以之宜筆之偏
 塵束四已指也
 其勢之不統明也
 執之也字似小指

毫筆之妙
 俗以之宜筆之偏
 塵束四已指也
 其勢之不統明也
 執之也字似小指
 力法不坊久但能
 此執至字自也
 傷中其若物之
 收其之至理法
 其法固亦之單指
 力高可以長久
 亦單指也其法

乃云...

お筆指毛より後
名に波を引はる

波勢を

使筆法

一 大指撮り中指導り

二 頭指白く均等

駐之鐵則捌之

三 中指制り末鐵削

但其餘勢未大

名撰之而撰

四 大指撮り中指導り

と撰波多初尾没

と撰波多初尾没
波無波則危安
あり

一 大指打り中指導り

と随勢也末斜

削撰り之決

二 中指前り取指

と先鋒の極

三 中指兼り大指

と程之執上

四 大指撮り中指

折り

五 頭指白く均等大

指と末位之行

一 定心平氣衆力
 運之勢文旂旄
 婀娜不存少達
 一 大指取指得力
 與之合勢足留
 之及汗如探友
 之出
 一 大指者其中物
 指柔柔之末不專
 所至亦流而來
 一 定心平氣衆力
 運之勢文旂旄
 婀娜不存少達

一 平云
 頸指取之次指中指
 導之甚平不專
 而生相停而成美

一 定心平氣衆力
 運之勢文旂旄
 婀娜不存少達
 何足與之平
 聊而不強者人
 目中之為銘也
 去之平氣也
 凡此是平然也
 尤甚耳

峯銳豪直勢均心速
 衆毛並浸頭吻腹柔

